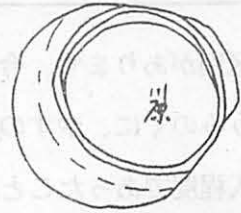


乙 頁

第88号 通巻16巻第3号
1996年9月30日 発行

守山市立埋蔵文化財センター
☎0775-85-4397

☎524-02
守山市立服部町2250番地



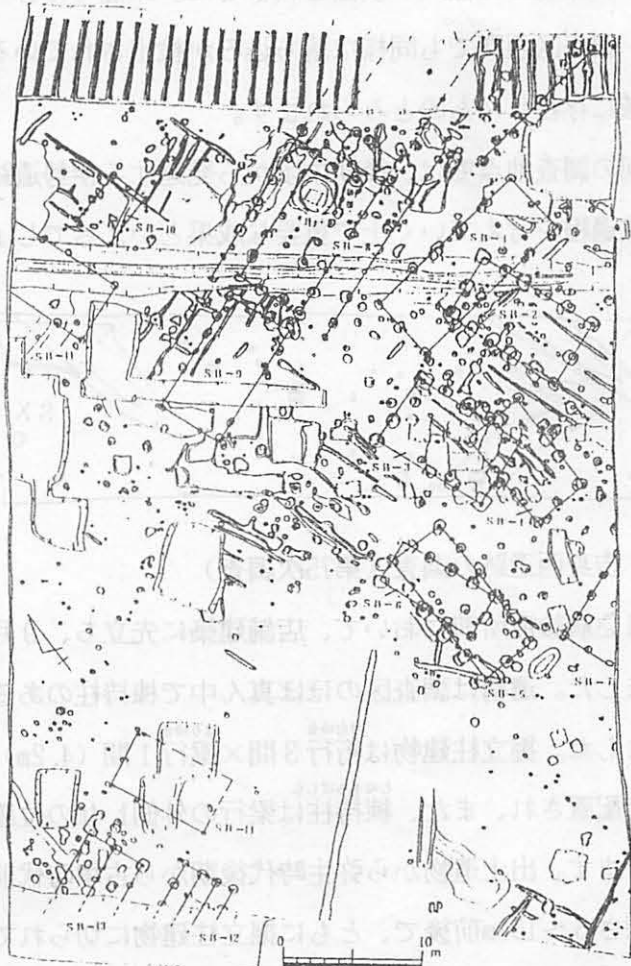
△ 二ノ畦遺跡出土墨書土器

☆ 二ノ畦遺跡の調査と現地説明会

平成8年2月から発掘調査を進めてきた吉身4丁目地先の^{にあせ}二ノ畦遺跡では、9月中旬までに奈良時代後半から平安時代前期にかけての掘立柱建物や井戸跡などが発見されました。^{なかせんどう}中山道沿いにある馬路石辺神社の東側の自動車会社跡地が宅地造成されることになり、それに先立って調査を行ってきました。9月までに約3,500㎡を発掘調査していましたが、東西・南北に棟をそろえた建物跡が14棟と井戸跡1基などが検出されました。今回の調査成果については、中山道と野洲川に近いことから「交通の便の良い所に設けられた地方の行政組織である郷(ごう)の役所跡ではないか」と考えられています。このあたりは、「野洲町史」などでは^{うまみちごう}馬道郷と推定されていましたが、最近中主町の^{にしがわら}西河原一帯の遺跡で、馬道氏や^{いしべ}石辺氏などの氏名を記入した木簡が出土したことから、馬道郷は奈良時代前半ころには中主町の西河原一帯にあったと考え直されるようになりました。今回の発掘調査で見つかった建物跡は、

奈良時代後半から平安時代にかけてのものであることから「奈良時代後半以降に馬道氏が中主町から移転したのではないか」ともかんがえられます。馬路石辺神社は平安時代中頃に編纂された^{えんぎしき}「延喜式」の中の神名帳の部分に記載された古い神社であることが分かっています。また、この遺跡が川の渡しに関係したことを示す資料として、「川原」の文字が墨書きされた土器があげられます。

奈良時代の行政組織は「中央」-「国」-「里(郷)」-「戸」にまとめられていて、「戸」は20~30人の家族、「戸」が50で「里(郷)」としました。「郡」はその郷を幾つか集めたものとし、その数によって大・中・小の区別がありました。国は現在の府県程度を指していますが、国も郡の数によって大・中・



小の区別があります。今回の調査地が馬道郷であるとすると「近江国益須郡馬道郷」と表現し、読みは（おうみのくに、やすのこうり、うまみちのさと）となるわけです。郷の人数はこれで1000～1500人程度であったことがわかります。旧野洲郡には7つの郷があったといわれていますので、7千人から1万人の人々が生活していたと考えられます。

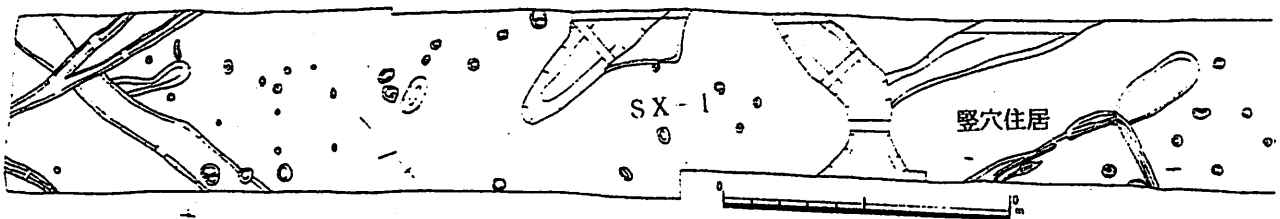
二ノ畦遺跡は、9月15日に現地説明会を開催しました。当日は秋晴れで150人もの見学者が訪れ川端教育長の「遺跡周辺の歴史的説明」をはじめ、担当者の説明を熱心に聞いていました。（山崎）

2、伊勢遺跡の調査（35次）

7月から8月中旬にかけて、二町町地先の水田地で宅地造成に先立ち発掘調査を実施しました。この地域は伊勢遺跡の北端にあたり、かつての調査では、弥生時代後期の^{ほうけいしゅうこうぼ}方形周溝墓が検出されていて、伊勢遺跡の墓域になっていたことが想定されていました。調査の結果、溝および^{たてあなじゅうきょ}竪穴住居などが検出されました。溝（SX-1）はコの字状を呈し、幅1m・深さ約30cmを測り、溝底より弥生時代中期末の台付き鉢などが出土しました。溝の形態から、方形周溝墓の一部とみられ、西辺の溝は^{さくへい}削平されて残存しなかったと考えられます。調査区の南隅では、方形プランの竪穴住居が検出され、壁際に^{しゅうへきこう}周壁溝がめぐり、床面では柱穴が検出されました。床面では弥生時代後期でも古い時期の高杯や甕が出土しています。調査区西隅でも同様な落ち込みが検出されていることから、伊勢遺跡に先行する時期に集落がこの地域に存在したものとみられます。

今回の調査地点では、後期中頃から発達する伊勢遺跡に先行する時期の遺構が検出された点で、遺跡の形成過程を考えていく上で重要な成果といえるでしょう。（伴野）

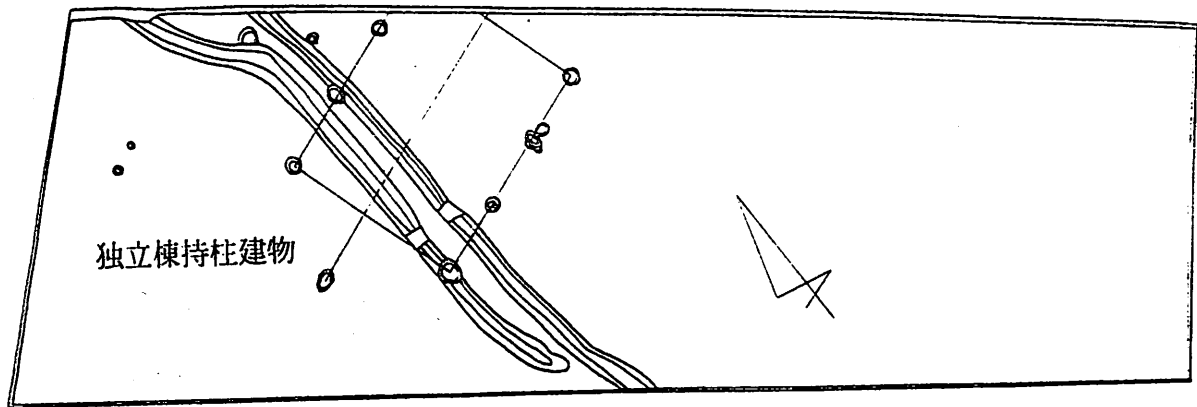
▼ 伊勢遺跡平面図



3、吉身西遺跡の調査（第75次調査）

休日急病診療所前において、店舗建築に先立ち、9月9日～18日までの間、165㎡を対象に調査を実施しました。遺構は調査区のはほぼ真ん中で棟持柱のある掘立柱建物が1棟、溝2条と少数のピットを検出しました。掘立柱建物は^{けたゆき}桁行3間×^{はりゆき}梁行1間（4.2m）×（3.5m）の大きさで、桁行の柱はほぼ1.4mの間隔で配置され、また、^{むなもちばしら}棟持柱は梁行の外側1.4mの位置にあります。柱穴は30～40cm、深さは28～42cmを測ります。出土遺物から弥生時代後期から古墳時代前期の時期と考えられます。2条の溝は、30cm前後、深さ5～10cm前後で、ともに掘立柱建物に切られています。溝から出土した土器から、弥生時代後期～古墳時代前期と考えられます。同遺跡ではこの時期の掘立柱建物はめずらしく、特に棟持柱が大き

く外に配置された建物(独立棟持柱建物)である点で注目されます。(畑本)



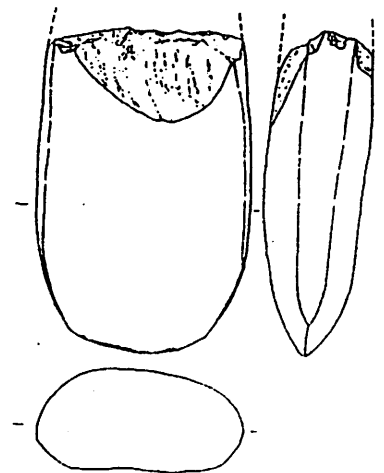
▲ 吉身西遺跡平面図



4、吉身西遺跡(第74次調査)

調査は目田川河川改修に先立ち、約2000㎡を対象に8月19日より開始しました。場所は県立保健専門学校と市立図書館との間です。調査途中ですが、9月末時点でわかったことをお知らせします。

調査区は4つに区切り、まずそのうちの約520㎡を調査しています。現在、竪穴住居9棟・溝状の落ち込み・柱穴群などが検出されていて、掘立柱建物が少なくとも5棟以上たつものと思われます。竪穴住居のうち1棟は、弥生時代後期の五角形住居とみられます。まだ、溝状の落ち込みを掘削している段階ですが、すでにコンテナ8箱分の須恵器・土師器が出土しています。その他に、ふとがたはまぐりばませいせきふ大型蛤刃磨製石斧が1点出土しています。(右図参照)



大型蛤刃磨製石斧

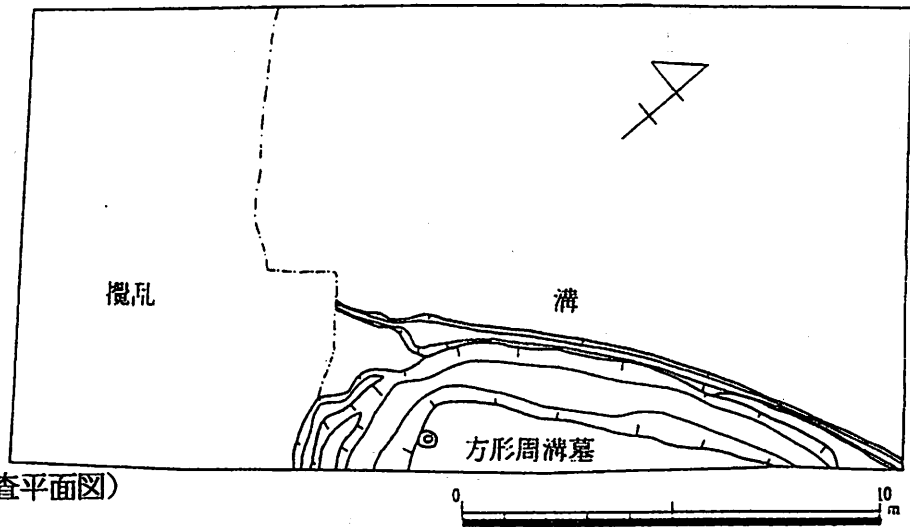
12月末まで調査を行う予定ですので、さいじ随時お知らせしたいとおもいます。(山中)

5、吉身西遺跡の調査(第73次調査)

守山警察署と県立成人病センターの間に広がる区画整理地内において、共同住宅建築に伴い7月22日から7月28日の間、発掘調査を実施しました。この調査区の南西側はかくらん攪乱を受けていましたが、方形周溝墓1基と溝1条が比較的良い状態で検出されました。

昭和61年度の調査で2列に配置される方形周溝墓群が検出されていますが、今回検出された方形周溝墓は、その墓群のうちの1基であると考えられます。この方形周溝墓の規模は、一辺しか検出されませんでした。約12m位であると考えられます。この方形周溝墓から市内では数例しか出土していない台付無頸壺が出土しました。時期は出土した土器から弥生時代中期末であると考えられます。また溝から

は土器は出土しませんでした。昭和62年度の調査で検出された溝の続きであることからこの溝の時期は古墳時代後期ころであると考えられます。(中村)



▷吉身西遺跡(第73次調査平面図)

6、古高城遺跡の調査

宅地造成工事に先立ち、6月3日から水田地、約1900㎡を対象に実施していた古高町字南屋敷の発掘調査は9月6日に終了しましたので、その成果を報告します。

図のとおり、調査地の北西、南西辺からは、幅5.0m、深さ1.6mの大規模な濠(SD-1)を、そして、その内側からはSD-1と同方向で巡る2条の溝(SD-2~3)を検出しました。調査地外に伸びるため、詳細は把握できませんが、いずれも屋敷地を区画するために掘り込まれたものと考えられます。そしてその内側の屋敷地内からは掘立柱建物(SB-1)をはじめ多くの建物柱穴、土壇、溝などが濃厚な密度で検出しています。

遺構の埋土は、(1)黒褐色土、(2)地山土に黒褐色土、灰色砂土の混入土、(3)灰色砂土に地山土、黒褐色土の混入土の3種類に区分することができ、その切合いから(1)→(2)→(3)の順序で時期が新しくなり、出土遺物から、(1)にはSB-1やSD-2、3の外側に点在するピットが属し、(2)にはSD-2、3やSK-1が、更に(3)には方形、円形の土壇(SK-2、9、11)や第3、6調査区で検出した柱穴群が属します。時期については、出土遺物から(1)は中世、(2)は近世、(3)も(2)より新しい近世の時期が考えられます。

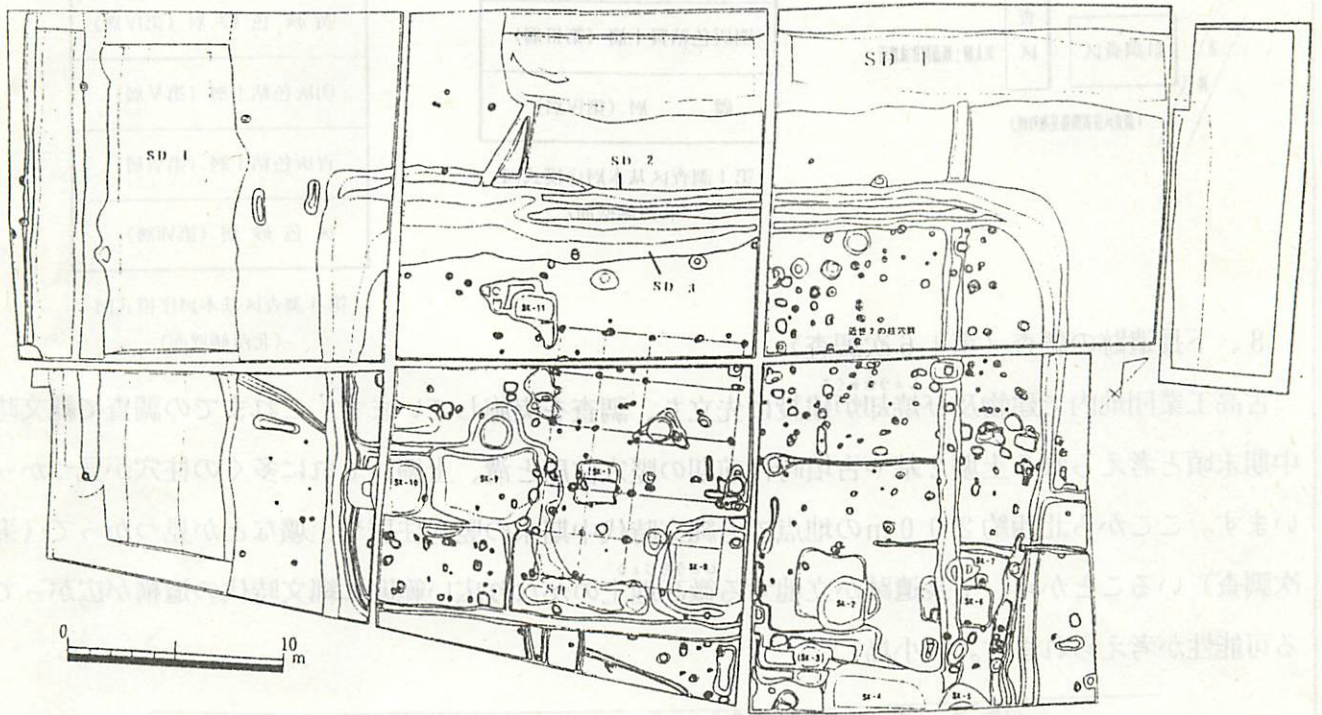
SB-1は現状で5間×5間の規模が考えられ、屋敷地内に位置しているものの、埋土や出土遺物からSD-2、3よりも古い遺構です。次に(2)の埋土で検出したSD-2、3や炉跡と考えられるSK-1から屋敷地内に建物が構築されていたと考えられますが、礎石を用いた建物らしく、その痕跡は検出できませんでした。(3)に属するSK-2、9、11からは多量の瓦や摺鉢などの土器、銅製の仏具、銅銭石仏、五輪塔、礎石が出土し、瓦の中には「福林寺」の文字を入れた軒丸瓦も見られ、遺構の性格を知る上で貴重な遺物といえます。

今回の調査では中世～近世の遺構を検出しました。SB-1や区画溝の外側に点在する柱穴は中世に属し、本調査地で検出した遺構の最も古い時期にあたります。

その後、近世（近世1の時期）になると、SB-1の様な掘立柱建物にかわって礎石を用いた建物が屋敷地内に構築され、近世2の時期にも検出した柱穴群から別の建物が構築されたと推測されます。

瓦などが多量に出土したSK-2、9、11はおそらく近世1の時期の建物の廃材やその当時の生活具を廃棄する目的で掘られた土壌で、近世1の時期の建物は、SK-2、9、11の出土品が示すように仏教施設の可能性が高いと考えられます。

今後、想定した仏教施設が単独であったのか、それとも大規模な屋敷地内の一部に設けられていたのかを究明していかなければなりません。（岩崎）



△古高城遺跡平面図

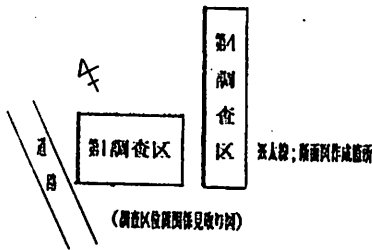
7、八ノ坪遺跡の調査

今回の地点では合計5つの調査区を設定して調査を行っています。現在は最終調査区（第5調査区）に取りかかっています。今回は、第4調査区でこれまでと層位が若干異なっていたので、それについて報告します。

第1調査区と第4調査区は距離にして約60m離れているため、必ずしも第II層及び第III層が対応しているとは言い切れません。現段階では、これまでの周辺の調査から、第III層が縄文時代後期～晩期に相当すると考えられますが、第4調査区第VI層から弥生時代中期の土器片が数点出土しました。このような点を考慮すると、旧河道を初めとしていくつかの可能性が想定されますが、今回の調査区では断面

観察の結果、河道の肩口に相当する部分は検出されませんでしたので、^{ていしちじょう}低湿地状の遺構である可能性の
 ほうが高いと思われます。

なお、各調査区ごとの関係に関しては調査が終了した段階で、また出土した遺物に関しては整理調査
 が進んだ段階で報告したいと思います。(小出)



耕作土 (第I層)
暗灰色砂質土層 (第II層)
明灰色粘質土層 (第III層)
礫層 (第IV層)

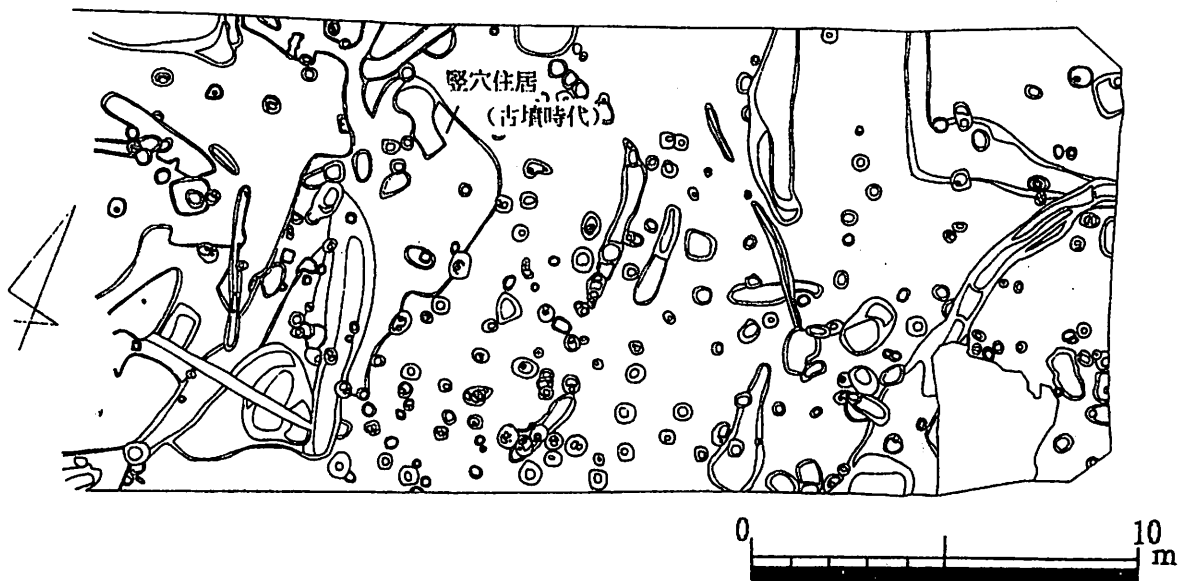
第1調査区基本層序模式図
 (北西側壁面)

耕作土 (第I層)
暗灰色砂質土層 (第II層)
明灰色粘質土層 (第III層)
黄灰色砂層 (第IV層)
明灰色粘土層 (第V層)
青灰色粘土層 (第VI層)
灰色砂層 (第VII層)

第4調査区基本層序模式図
 (北西側壁面)

8、下長遺跡の調査 (第16次調査)

古高工業団地内で建物及び焼却炉建設に先立ち、調査を実施しています。これまでの調査で縄文時代
 中期末頃と考えられる土壌2基や古墳時代前期の竪穴住居と溝、土壌、それに多くの柱穴が見つかって
 います。ここから北西約200mの地点でも縄文時代中期末の竪穴住居や土壌などがみつかって (第13
 次調査) いることから、下長遺跡が立地する^{びこうじょう}微高地上のかなり広い範囲に縄文時代の遺構が広がっている
 可能性が考えられます。(小島)



△下長遺跡平面図

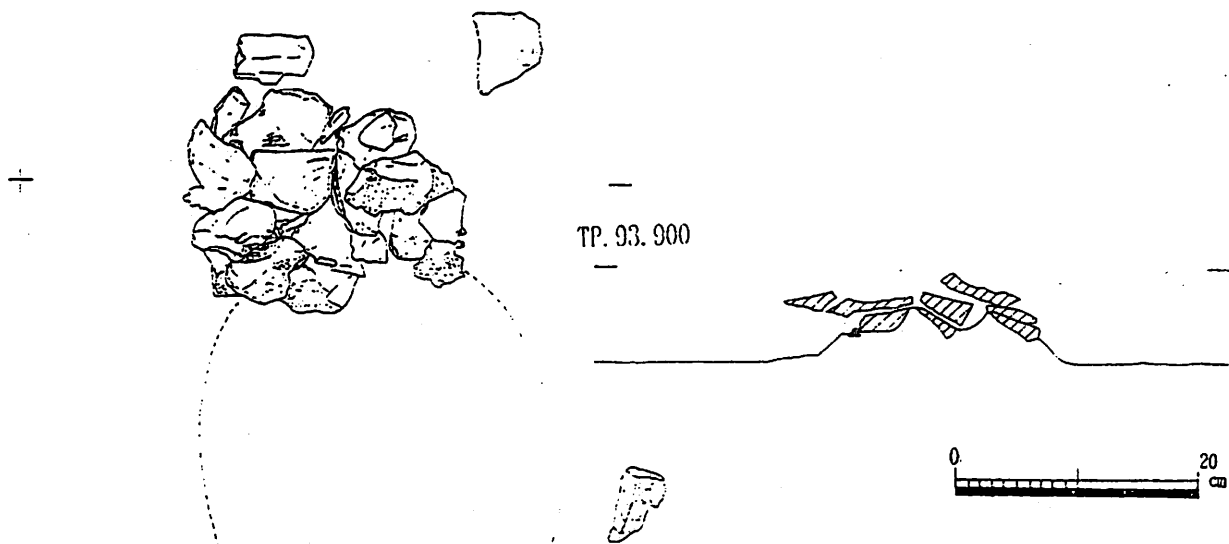
9、塚之越遺跡 第11次調査

今回は、縄文時代の調査について報告します。

縄文時代の生活面は、近代から弥生時代にわたる遺構の^{きばんそうちゅう}基盤層中にあたり、遺構の掘り込みが深いなどあまり良好な状態では残存していません。しかも、生活面の形成状況が断面観察をおこなっても一部でしか確認できませんでした。したがって、基盤層中に土器や石器が包含されているという状況です。このため、調査方法としては調査区全体を5～10cmづつ掘り下げて、遺構の検出や遺物の広がりについて調査しています。

このような調査を行っていくなかで、サヌカイトの破片が多数発見されたので報告します。サヌカイトの破片は一部上層遺構であるピットに切り込まれて失われていますが、直径約20cmの範囲にかたまつて約30点程出土しました。周囲には、小さな河原石が多数出土していて、この中にサヌカイトの集積が認められます。時期は周囲から出土した土器より縄文時代中期末頃の年代が与えられます。

なぜ、サヌカイトがまとまって出土したことについてですが、この場所が石器製作工房であり、不用となった破片をまとめて捨てたものなのか、石器の原材料を^{たくわ}蓄えていたのかなど、様々なことが考えられるでしょう。(佐々木)



サヌカイトの破片出土状況

10 古高遺跡 (第11次調査)

現在、守山市大門町下屋中に所在するダイハツディーゼル(株)独身寮の敷地内で調査を行っています。調査地の北側には境川、南側には吉川川が流れ、この両河川によってできた微高地上に古高遺跡の集落は営まれています。今回の調査地からは溝3条、掘立柱建物3棟、柱穴、土壇等が見つかっています。掘立柱建物は中世のもので、集落がここまで広がっていたことが分かりました。詳しいことは次号でお伝えしたいと思います。(藤原)

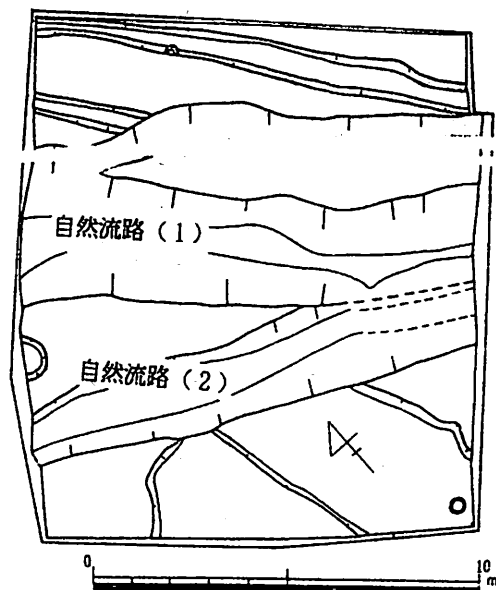
1 1 益須寺関連遺跡

吉身小学校の東側で、共同住宅建築に伴って、8月1日から8月8日にかけて発掘調査を実施しました。遺構面は表土より約50cm下で検出されました。この調査区から土師器の破片が多数見つかりました。おそらくこの地点は、当時の生活面より低かったものと思われ、沼沢地のようなものであったのではないかと考えられます。(中村)

1 2 酒寺遺跡 (第40次調査)

8月21日から9月6日にかけて播磨田町内において、共同住宅建築に伴って発掘調査を実施しました。その結果、溝2条(SD-1、SD-2)と自然流路(1、2)を検出しました。この自然流路(1)の下層から、弥生時代後期の土器が、また上層からは須恵器などが出土しました。

また、自然流路(2)からは須恵器などが多数出土しました。この自然流路(2)は自然流路(1)がある程度堆積した段階で、何らかの原因で(1)を若干削り取り、新しくできたものであると考えられます。(中村)



§ § § § § 視点

☆弥生集落への想い☆

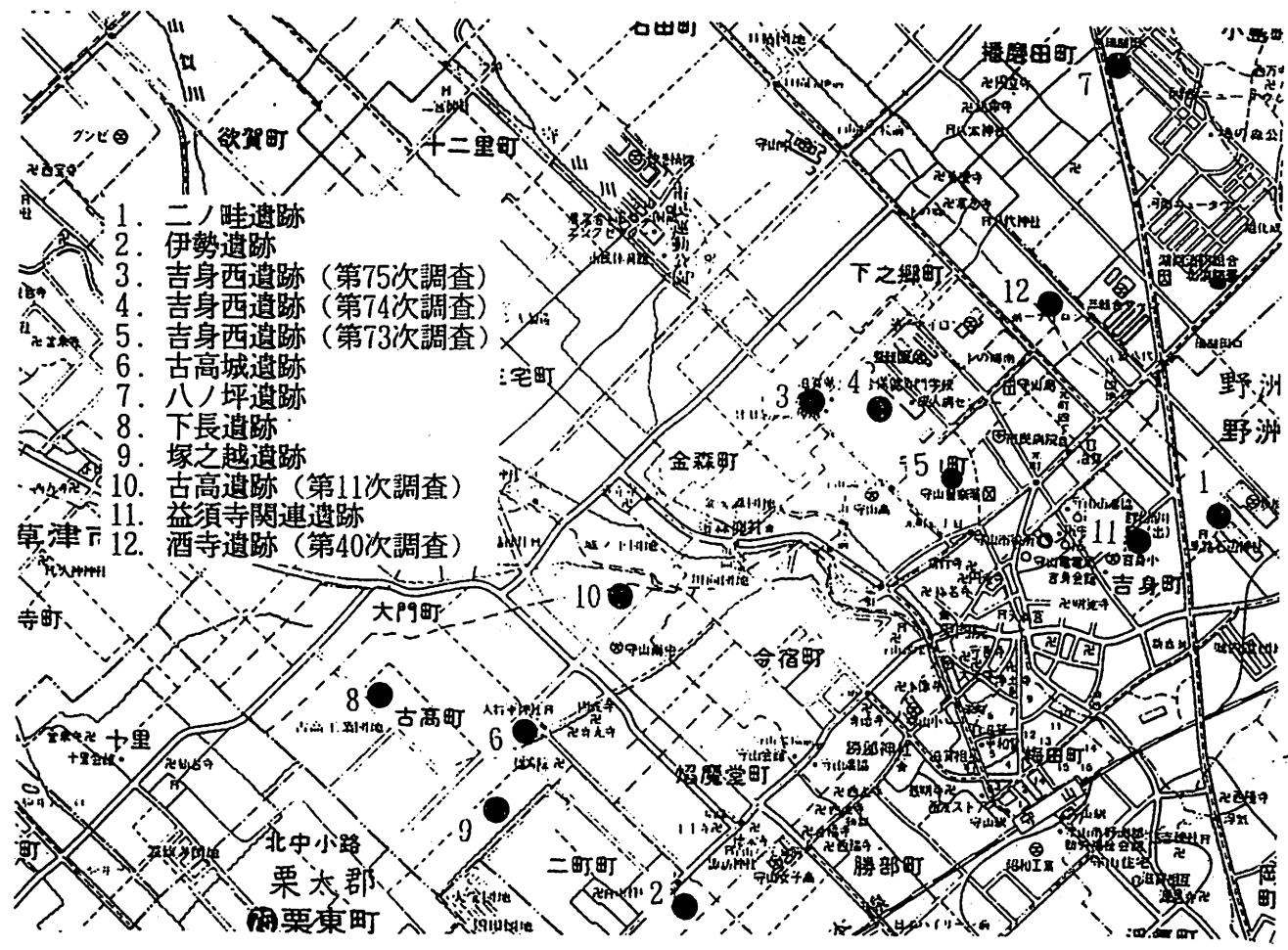
今からもう10年くらいまえのことになりますが、大学の史料講読の授業で「山陵」、すなわち天皇陵の記事について調べたことがあった。古墳が造られた時点とそれ以後の状態が視覚的にどのように変化したのか、というのが問題だったように覚えている。古墳研究は、形や時期、造営方法、群の構成、また出土遺物の個別研究などは盛んに行われてきたものの、時を経て、世が変化するなかで、「その古墳がどのように姿を変えていくのか」、また「社会にどのように意識されているのか」、ということあまり、探究されてこなかったように思う。話は変わるが、これと同じような話で、弥生時代の環濠集落も、集落の規模や外周する濠の状態、内部の住居形式とその変遷などについてはよく比較検討されてきた。しかし集落の外観的特徴でもある立地条件や自然環境についてはあまり議論されてこなかった。

さて、守山市内の弥生集落もここ10年間の調査で、環濠を持つものを持たないもの、規模や造営時期、内部の状態などがぼんやりと見えてきた。しかし、その遺跡を多面的に評価するうえで必要な地形や自然環境の分析は立ち遅れていると言わざるをえない。ムラのどのあたりに川が流れ、森や林はどの辺りにあったのか、また墓や水田はどこに造られていたのかなど、その全てが地形や自然環境に制約をうけているとまでは言わない。しかし、集落が立地している場所や景観を復元する作業は、土器や石器の型

式や組成の変化を追うことと同様、遺跡を考える上で大変重要なことだと思う。今年の5月頃、奈良県の唐古・鍵遺跡発掘調査60周年の展示会「弥生の風景」を見学した。そこには、これまでに調査されてきた遺構を個別に検討し、地形を復元し、自然環境を盛り込んだ当時の集落景観図を提示してみせてくれた。その評価については賛否があると思うが、私にとっては、調査担当者の弥生のムラのイメージがたいへんわかりやすいものであった。また最近、雑誌に載った大阪、池上・曾根遺跡の弥生のムラでは、環濠集落の内部に湿地帯が広がり、水田としてかなりの範囲が土地利用されていたと指摘された。これらの集落イメージの変化は、集落論にとっても重要な問題で、驚きを感じた。私たちが頭のなかに思い描く弥生ムラのイメージは、いつも発掘現場で見ている黄褐色の乾燥した裸地の上に住居や倉庫が建っているモノクロの世界である。しかし、そのような自然環境の映しだされない集落像は、どれだけ当時の実像に近いものなのだろうか？

今年調査された下之郷遺跡の環濠からは、20種類以上の植物遺体や動物遺体が確認された。「枯木に花を咲かせましょう」ではありませんが、弥生ムラのイメージを市民にわかりやすく表現することができればと体験学習会を計画している。モノクロからカラーの世界、そして乾燥した地面から生き生きとした土壌になるよう夢をふくらませている（K記）。

◇ 守山市内遺跡調査地図



☆ 特別展の開催 ☆

当センターでは、11月の文化財保護強調月間にあわせ、^{しゅうき}秋季特別展を開催します。巨大な環濠集落、下之郷遺跡は、これまで23次の調査から多数の石鏃や石剣・銅剣が出土し、さらに、最近の調査から戦争に備えた門や建物と銅剣の発見から弥生時代に戦争があったことがわかりました。今回はこれらの調査成果をまとめて公開します。また、^{こうえんかい}関連行事として講演会を開催しますので、ぜひ、ご来館下さい。

記

1. 開催テーマ 『弥生時代に戦争があった』 -下之郷遺跡の調査から-
2. 開催期間 平成8年11月2(土)～11月24日(日)
3. 開館時間 9:00～16:00 期間中無休
4. 講演会(1) 日時 11月3日(日) 午後1:30から
演題 「古代植物と下之郷遺跡」
講師 木田千代美氏 滋賀県立琵琶湖博物館学芸員
- 講演会(2) 日時 11月10日(日) 午後1:30から
演題 「弥生時代の青銅武器・武器形祭祀」
講師 岩永省三氏 奈良国立文化財研究所主任研究官

※ともに守山市埋蔵文化財センター2階会議室で開催

☆ 体験学習会のご案内 ☆

来る、11月3日(日)、特別展期間中に「探そう! 弥生時代の植物」と題する体験学習会を催します。今年の夏に調査した下之郷遺跡の環濠より採取した^{さいし}弥生時代の^{どじょう}土壌を、調査担当者らとともに洗ってふるい出し、古代植物を探します。これまでに、ドングリやウリ、米、ノブドウ、木の葉などが見つかっていて、これからどんな植物が見つかるか楽しみです。ふるってご参加下さい。

記

- 日時 11月3日(日) 午後10:00から
場所 市立埋蔵文化財センター
対象 市内小中学生および保護者
人数 30名 (事前申込み者に限る)
申込先 10月31日(木)までに埋蔵文化財センターまで (☎85-4397)

【編集後記】暑かった夏も終わり、いつの間にか秋風が冷たく感じられる季節となりました。いつの間にか半年が過ぎ、また特別展の時期をむかえています。今年の前半期の調査で話題となった下之郷遺跡をめぐる展示会ですが、稲刈り後一斉に始まった調査に追われながら、準備の真っ最中です。(BK)